

# 北海道の低地湿原におけるエゾシカの空間分布と植生への影響

生物生態・体系学講座 植物生態・体系学分野  
村松弘規

## (背景と目的)

自然度が高く国立公園や国定公園に指定されている北海道の低地の湿原では、エゾシカの進出が問題となっている。本研究は湿原におけるエゾシカの利用環境、生息痕跡の時空間的变化、採食植物種、高層湿原植生への影響を解明することを通じて、湿原にエゾシカが及ぼす影響の現状を明らかにすることを目的とした。本発表ではこのうち、釧路湿原高層湿原植生にエゾシカが及ぼす影響に関して報告する。

## (方法)

調査地は日本最大の湿原である釧路湿原のうち、環境省温根内ビジターセンター周辺の湿原(以下、温根内・赤沼湿原)で、植生は釧路湿原最大の面積を誇る高層湿原である(325 ha)。調査ではまず、湿原が受けるエゾシカの利用圧の変化を検証するため、2004年・2010年に撮影された航空写真よりエゾシカによる獣道(以下、シカ道)をGISを用いて抽出しその長さを計測した。次に、エゾシカの影響による植生変化を植生調査により調べた。調査はシカ道や裸地(ぬた場など)の直上(「影響大区」:44区)とそれ以外(「影響小区」:35区)で行い、同調査地内で2002~04年に行われた植生調査区(「過去区」:79区)と多重比較により解析した。比較する前段階でクラスター分析による群落区分を行い植生を統一させた。比較項目は植被率・種数・構成種の被度とした。なお、「影響大区」「影響小区」では出現種の採食痕の有無を記録した。

## (結果および考察)

航空写真から抽出したシカ道は7年間で4~8倍に増加した。一方、採食痕を確認した方形区は19/79区で、大半の方形区は採食を受けていなかった。エゾシカが高層湿原植生に及ぼす影響の駆動因は採食圧よりも踏圧が大きいと推測された。

過去の植生調査と比較解析した結果、今回の調査方形区は2つの植生(カラフトイソツツジ群落、ミカヅキグサ群落)に大別された。どちらの群落においても「影響大区」において植被率が顕著に減少した一方、種数に有意な増減は無かった。エゾシカが高層湿原植生に及ぼす植生破壊の影響は、種多様性に対しては小さいものの、植被率を顕著に減少させると考えられた。この破壊はエゾシカの踏圧によって引き起こされるが、構成種ごとに解析を行った結果、その感受性は生活型によって異なり、特に矮性低木と蘚苔類が敏感であると推察された。

「影響大区」における植生変化はミカヅキグサ群落で確認された。踏圧により生じた裸地には一年生草本であるホシクサ属植物(エゾホシクサ・クシロホシクサなど)が優占した。同様の減少が釧路湿原の低層湿原域や尾瀬ヶ原湿原でも確認され、シカにより一年生草本が優占する代償植生への遷移が生じることが一般化された。

エゾシカは湿原植生の種多様性に強い影響を与えていないため、シカの影響を排除すれば植被率が回復する可能性は大きい。しかし、長い年月を経て成長した湿原の微地形が回復し、元の植生に戻るまでには非常に長い時間を要するため、一刻も早い保全対策の構築が必要となる。